

08 ヴィットリオ・エマヌエル二世のガレリア

パリのエッフェル塔の建設よりも約20年前に、ミラノではヴィットリオ・エマヌエル二世のガレリアが建設されました。ガレリアの中央十字路には、中央の八角形のまわりに四方への軸が結合しており、そのうち長い2つの軸はドゥオーモ広場とスカラ座広場を結んでおり、一方、短い2本は近くの小さな通りにつながっています。ガレリアの建設事業はミラノ市の実施したコンペで優勝したジュゼッペ・メンゴーニに委嘱されました。不幸なことにメンゴーニは、1877年12月30日のガレリア落成式前夜に工事足場から転落して亡くなりました。この事故の記念碑がガレリアのドゥオーモ広場側の凱旋門の左側の柱の上に現在も置かれています。

当時はベル・エポックの時代でした。ガラスと鋼鉄のモダンな構造の丸天井の下にはすぐにミラノ一流の店舗、充実した書店、ファッションなレストランやカフェなどが立ち並びました。ここではシニョーラたちが、パリの雑誌を真似した最新スタイルの帽子を着飾っていました。そして音楽家、文学者たちの社交の場となっていました。ミラネーゼたちが多少の悪意を持って「ジジョーネ」と呼んでいた人たちが頻繁に行き来していました。この言葉はすぐに通常使われるイタリア語になってしまったほどでした。この「ジジョーネ」とは胸をふくらませてオペラのアリアなどを高らかに歌い、ガンブリヌスやカンパーリなどのパールのテーブルに座っている劇場支配人などに強く印象をつけて、劇場への出演契約を結ぼうと試みるオペラ歌手のことをさしています。

今日でもガレリアはミラノの「よき客間」であり続けています。ここではまだ19世紀特有の雰囲気息づいています。現在では凱旋門の左側にあるかつての「カンパーリ」のみがオリジナルのモザイクや内部調度品を維持しています。他の店舗もともかくはリパティスタイル黒字に金の看板を保っています。そして、至るところに、この時代のミラノ特有の折衷主義が漂っています。

中央部の大きな八角形の床石の頭上は高さ47メートルにおよぶガラスのドームに覆われており、頭上の半円形の巨大なモザイク画はアフリカ、アジア、ヨーロッパ、アメリカの4大陸を寓意的に描いたものです。一方、中央の八角形の床面にはイタリアを統一したサヴォイア王朝の紋章が刻まれており、そのまわりを、イタリア主要4都市の紋章が取り囲んでいます。すなわち、ローマの狼、フィレンツェの百合、ミラノの十字を描いた盾、そしてトリノの雄牛。このトリノの雄牛のデリケートな部分を踏むと幸運が手に入るという厄除けの迷信的ないつたえが広がりました。

ガレリアの床面はその後、第二次世界大戦中の爆撃によりほぼすべてが破壊されました。1967年に全面修復が終了した際、ミラネーゼたちは「雄牛」にかつての「厄除けお守り」の備わっていないことを知ってがっかりしました。それにもかかわらず、今日でも多くの人がまさにこの場所に右足の踵をおいて3回回転しています。これでは幸運が来るどころか、頭痛がきてしまうようですが。